



学校教育目標

ここに学び ここで遊ぶ ここがふるさと上山の子

<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/kamiyama/>

かみやま



「型」の大切さ

校長 窪田 剛久

FIFA ワールドカップで沸いた6月も終わり、これからの猛暑が心配される7月に入ります。喝水が心配された首都圏の水がめもこのところの雨で回復してきているようですが、全国的にみると喝水傾向にある水系もあるようです。限りある資源は大切にしたいものです。今私たちには資源の無駄遣いや環境への負荷を最小限に抑え、天然資源の消費を減らして繰り返し循環させる持続可能な「循環型社会」の構築が求められています。

さて、子育てや教育に迷った時、「子どもを『型』にはめるものではない。」といった言葉が聞かれることがあります。それは本当にそうでしょうか。私たちの「ものの見方」や「考え方」が身に付いた過程を考えると。自ずとその答えが見えてきます。



GIGA スクール構想導入以降、日本の小学校では一人一台端末を使用した授業が当たり前となりました。そのため指導の重点が少しずつ以前と比べて変化してきてはいますが、今でも小学校では「ノート指導」を大切にしています。「ノートぐらい自由にとってもいいのでは。」という声が聞こえてきそうですが、低学年の児童ともなると、まずノートのとり方が分かりません。そこから始まり、学年が上がるに従って、整理されたノートのとり方を身に付けていきます。例えば理科では、「学習課題」「予想」「実験方法」「実験結果」「結果から分かること（考察）」「まとめ」のように、順序立ててノートをとっていきます。ノート見開きで一実験が一般的です。こうしたパターン化されたノートのとり方は、いずれ中学校や高校の

実験レポートの書き方に繋がっていきます。連絡帳などもそうですね。低学年の頃は、時間割や持ち物、宿題など記入欄が明確化されたものを使って、連絡帳の「型」を身に付けます。学年が上がるたびにシンプルな書式のノートとなり、いずれは罫線だけでも必要なことを落とさずにメモをとることができるようになります。

このような「型」の組み合わせが「学び方」となっていきます。「学び方」が分かっていると、未知なるものと出会ったとき、新しい経験をしたときでも混乱せずにその事象から学び、新しい「ものの見方」や「考え方」を身に付けていくことができます。私たちはこのようなことを繰り返して、多面的・多角的な見方や考え方を培ってきたのではないのでしょうか。小学校はそうした「ものの見方」や「考え方」を育む、まさに入り口なのです。

横浜市は「横浜教育ビジョン 2030【生きて はたらく知】」の中で、次のように言っています。「いつの時代でも、基礎・基本は学習や生活の基盤ですが、これからは、社会とのつながりを考えながら学んだことをどのように使っていくかがますます重要になります。そのため、多面的・多角的な見方や考え方で問題を発見し、身に付けた知識や技能を使って思考力・判断力・表現力等をはたらかせながら、よりよく解決していく力を育みます。」目まぐるしく変化し続ける予測困難な時代だからこそ、新しい経験に柔軟に対処できるよう、私たちは子ども達に「学び型」を伝え続けています。

それ以外にも、小学校ではあらゆる場面で「型」を教えています。それは生活面においても言えることです。挨拶の仕方から始まり、給食の身支度、掃除の仕方、緊急避難の仕方など、将来生活を切り開いていくのに必要な、最低限の「型」を身に付けさせようと、私たちは日々子どもと向き合い、努力を重ねています。

そもそも剣道や柔道、書道など、「道」に通じるものには「型」が付きものです。そういった意味では、私たちは「型」になじみのある民族だということができるでしょう。無理に「型」にはめるのはもちろんよくないことだと思います。しかし「型」を身に付けることは、とても大切なことだと思います。リユース、リサイクルが当たり前の「型」となり、循環型社会の実現に近づくかもしれません。保護者の皆様も、子どもたちがどれほどの「型」を身に付けているか、この夏確かめてみてはいかがでしょうか。